

The residential structure and its change in Tokyo: 1920-1970

著者	Ueno Kenichi
内容記述	Thesis--University of Tsukuba, D.Sc.(B), no. 191, 1984. 3. 22
発行年	1984
URL	http://hdl.handle.net/2241/4802

氏 名 (本 籍) ^{うえ} 上 ^の 野 ^{けん} 健 ^{いち} 一 (群馬県)

学 位 の 種 類 理 学 博 士

学 位 記 番 号 博 乙 第 191 号

学 位 授 与 年 月 日 昭和59年 3 月 22 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 5 条第 2 項該当

審 査 研 究 科 地球科学研究科

学 位 論 文 題 目 **The residential structure and its change in Tokyo : 1920-1970**
(東京における居住地域構造と其の変化—1920 年から 1970 年まで—)

主 査 筑波大学教授 理学博士 奥 野 隆 史

副 査 筑波大学教授 理学博士 山 本 正 三

副 査 筑波大学教授 理学博士 正 井 泰 夫

副 査 筑波大学助教授 理学博士 高 橋 伸 夫

副 査 筑波大学助教授 理学博士 齊 藤 功

論 文 の 要 旨

本論文の目的は、因子生態分析の方法に基づいて、わが国最大の都市である東京の居住地域構造を解明するとともに、その時間的変化過程を追求することである。

この目的の達成に際して、(1)都市全域を居住地域として位置づける。(2)居住者の社会・経済的特徴をもつ地域集団として居住地域をとらえる、という観点に立ち、居住者の社会・経済的特徴の潜在次元を見出すための因子分析とその空間的分布を要約するためのクラスター分析とを組合せた因子生態分析を、1920・1930・1970 の 3 時点について行なった。そしてこの分析から導かれた 3 時点ごとの基本的な居住地域構造を比較することによって、その構造の不変的側面と変動的側面を見出した。本研究の結果、著者は次の結論を得ている。

- 1) 東京における居住地域を規定する次元は 3 時点を通じて家族的地位と社会的地位であるが、前者が後者より重要な意味合いを有する。
- 2) これらの 2 つの次元は、1920 年と 1930 年においては相互にかなり密接な関連性をもつが、1970 年では独立的な性格を有するに至っている。このことは東京が第二次世界大戦前では工業化途上の都市であったが、戦後では近代的欧米型の都市に変化したことを示唆する。
- 3) 居住地域の配列関係に関しては、1920 年と 1930 年においては各種の地域の規模に相違はあるものの、中心部での大世帯商業者地域及びその周辺での独身就業者地域の同心円状配列と、東部で

の中世帯工業者地域及び西部でのホワイトカラー地域のセクター状配列という単純な構造が認められる。このことは上記の2時点における2次元の関連性の存在を反映するものである。

- 4) 1970年では居住地域の多様化と細分化がみられ、中心部での大世帯商業者地域は消滅し、多様な特徴をもつ地域に分化している。他の地域も同様に、家族的地位と社会的地位との各種の組合せによって特徴づけられる地域に分化している。それらの地域は前2時点の場合と異なり、その境界は不明確になっているが、全体的に同心円状配列を呈する。

審 査 の 要 旨

本論文は都市の地域構造を扱った研究であるが、その居住的側面を主体としたところに大きな特徴がある。この側面に関する従来の研究においては、個別的な指標による特定の時間断片についての構造を考察するものが大多数を占め、そのために都市の居住地域の明確な総合的意味づけと構造の解明がまたれていた。特に大都市についてはその要請が強い。本論文はそれに対して総合的な指標を使用し、時間を通じての本質的な構造の解明を目指した。ここで用いられた因子生態分析法は著者独自の方法ではないが、導出された基本的な居住地域の時系列比較によって、第二次世界大戦前後において地域の規定次元間の関連性が異なること、それに伴って地域の意味合いとその配列関係が多様化、細分化していることなど新しい知見が得られた。

このような新知見は、都市の地域構造論上高く評価できるとともに、本研究の成果は、わが国の他の大都市の構造さらには諸外国でのそれとの比較を可能にさせ、それによって都市地理学の発展に大きく貢献するといえる。

よって、著者は理学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。